
涼宮ハルヒの龍騎

桜井豪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの龍騎

【Nコード】

N4545G

【作者名】

桜井豪

【あらすじ】

転校生「神空夏輝」は父親の仕事の都合で北高へとやってきた。しかし、そこは普通の日常とかけ離れていった。カードデッキを拾ってしまったときから…涼宮ハルヒの憂鬱と仮面ライダー龍騎とのコラボ！都合により、2ヶ月ほどこっちは書けません。

一章（一話転校生）：神空視点

俺の名前は神空夏輝^{かみそらなつき}、一応高校2年生だ。

父親の仕事の都合で北高に転校することになった。

前の学校と同じように普通の生活を楽しめるを思っていたが…いや
はや。

あんなことになるとは…

「もう皆知つてると思いますが、今日2年5組に転校生が来ました」

担任らしき教師に呼ばれ、俺は教室に入った。

「え、と××県から来た神空夏輝です」

すると、担任は俺の名前を黒板に書き始めた。

「じゃあ、神空君はキヨン君の隣に座ってください」

「え？キヨン？」

「ああ、ごめんごめん、窓際のボーツとしてる奴の隣だ」

指を指された方を見て、すぐに理解ができた。

キヨンと呼ばれた奴は「めんどくさいです」という顔をしながらこ
つちを見ていた。

「えーっとキヨン君ですね、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

予想通り、キヨンという男は俗にいう「事なかれ主義」という感じだ。

「では、HRはこれで終わりだ」

「起立、礼」

前のところと授業はそんなに離れておらず、遅れるという事は無さそうだ。

そんなわけで、俺は部活を探すことにした。

「おい、転校生！野球部に入れよ！」

「いや、男ならサッカー部だ！」

「女子にもてたいならテニス部に！」

「静かな茶道部などどうですか？」

なんというか、典型的な勧誘だ。

でも、俺は卓球部に入ろうと決めていたので勧誘を全て断った。

「え？男子の卓球部はない？」

「うん、3年前から男子の部員が入らなくなっちゃって」

「マジかよ……」

「よかつたらバスケ部に入らない？」

「結構です」

俺は、すぐに体育館から急いで離れた。

「さて、と部活はどうするかな」

なにげなくつぶやいてると後ろから襟を掴まれた。

「ぐえっ」

「ねえ、ちよつとあんた！」

振り向くと、結構スタイルのいい美人が立っていた。

「あ、確か涼宮さん……」

隣のキョンのさらに後ろ、つまり斜め後ろの席の涼宮さんだった

「あんたさ、なんか部活決めた？」

「いえ、この学校卓球部が無いみたいなんで、部活どうしようかな、って」

ちなみに、この言葉が後でどんなに後悔するか、このときは知りよ

しも無かった…。

「なんか、おもしろい部活ならどこでも…」

「じゃあ！うちに来なさいよ！」

「なんて部ですか？」

「SOS団よ！」

「え、エスオーエスダン？」

問いに答えてもらえず、俺は涼宮さんに引っ張られていった。

「じゃあ、紹介するわ！新しい団員の神空夏輝君よ！」

「待ってください！俺は入るなんていつてません！」

「ほらほら！みんなも自己紹介してよ」

（え〜！無視ですか？）

「小泉です、よろしく」

「あ、朝比奈みくるですう…よろしくおねがいしますう」

「長門…」

（え？これって確定？俺が入るの決定事項なの！？）

（まあ、しかたがないか…コレは抜け出そうとしても無理だ）

「はあ…」

『ガチャ』

「あーキョン！ーまた遅れたわね！」

「あゝ悪かった、悪かったって…お前！ーまた無関係の奴を巻き込んだのか！？」

「なによ、悪い？」

「ああ、悪いね！すごく問題ある！」

（もしかして…ここにいる全員、涼宮さんに巻き込まれた人？）

「あの、もういいです…入りますよSOS団に…」

「ほらゝキョン！入りたいって言ってるじゃない！」

「いや、いつてないだろ…」

（あゝあつ前途多難だなあゝ）

「じゃあ、『謎の転校生 part 2』ってことで神空君をSOS団に迎え入れるわ！」

「よろしく…」

「あらためまして、小泉ですよろしく」

「朝比奈みくるです…えと…いちおう3年生です…」

「長門…」

「俺はいいよな？」

しかし、俺はずっと気になっていたことをこのさい、聞いてみた。

「あの、本名は？」

「……禁則事項だ」

「ふえ？」

まあ、たわいも無い会話をして、解散した。

まだ、平和だった。

問題は次の日……

そう、例のカードデッキを拾ってしまったことだ。

一章（一話転校生）：神空視点（後書き）

今回は転校生の神空視点です。

他に、キヨン視点、後に出てくる高野視点などがあります。
そのうちキャラ紹介などやりたいと思います。

一章（二話キヨン、変身！！）：キヨン視点（前書き）

はつきりいつて中学生なんで文法の使い方がうまくできません。
文章力も、あまりいいものとは思えません。

ですが、自分のできるだけのことをしたいと思います。

一章（二話キョン、変身！！）：キョン視点

はつきりいつて最近は平和だ。

別に、過去に飛んだり、ナイフで殺されそうになったり、ありえない超常現象がおきたりもしていない。

古泉に言わせれば、それはハルヒが最近落ち着いているかららしい。いわれてみれば入学当初と比べたらずいぶん丸くなったような気がする。

正直いうと…ものたりないような気もする。

眼を開けたら、閉鎖空間です。なんてことになってないことを願おう。

『…か…え…』

ハルヒか？たのむからもう巻き込む！！

『…た…k…』
『騎』

はつきりしろ！！ってか…誰ですか？

『…tた…か…e…龍…k』

…鷹？龍？なにがいいたい？

「たたかえ！！龍騎！！」

「どわああああ!!」

「ど、どうしたの? キョンくん!？」

妹がものすごく驚いたような顔でこちらを見ている。

まああんな大きい声を出せば誰でもビックリするだろう…

「ん…ああ、ちょっと嫌な夢を見た」

妹は教えてというような顔をしながらこっちを見ている。

妹よ、すまん、全然覚えていないんだ。と弁解した

「んーっ」

満足していないような反応だがどうやら解放してくれたようだ。

あと、このいつのまにか枕元においてあった箱はなんだ?

なにやら龍の紋章らしきものが記されている。

枕元といえば、時計の針は…

「ってもう7時半かよ!!」

俺は急いで階段を下りていった。

今日の活動日記。

ハルヒは来るなり「明日はゲーム大会に出るわよ!!」といいました。

僕は、当然のことながらツツコミましたが、無視をされ、明日ゲーム大会に参加することになってしまいました。
すこしは俺の意見も聞いて欲しいものだ。

追伸

SOS団のHPに神空のプロフィールが乗りました。

ゲーム大会。

内容はストリートファイターのようなアーケードゲームの大会らしい。

はつきりいつてそういうゲームは苦手だ。

また長門がキャラ無敵とかのインチキをするのだろう。
ところで…

『キシヤア………』

さつきからへんな音が聞こえるのですが…

ああ…また超常現象に巻き込まれるようだ。

「ん?」

振り向いた瞬間、カラスのようなやつが鏡の中から出てきた。

「どわあ!!??」

Help me!!長門様!!

どうしてか、俺は靴の中から今朝見つけた箱を取り出した。
持っていた箱g:箱をもっていた手が勝手に動いた。

箱が鏡に映るとなにより鏡からへんな金属の塊が出てきた。

「なんだ?これ」

慣れ、というのは恐ろしい。

いろいろと超常現象に出会ってしまい、こういうことに慣れてしまった自分がある

まったく、恐ろしい

「腰にくつついたぞ?これ」

ソレは現実存在するものに言い換えるとベルトというところか。
しかし、普通のベルトとは違い、かなり太い。

また箱をもっている手が動きソレのポツカリ開いてる部分にソノ箱を収めた。

えーっと。この姿はいつたい？

左手には龍の頭のようなガントレットが付いている。

体中に鎧のような無機質な物などが付いていて、手とか腕とかに赤く、硬い布を身にまとっている。

これは…ハルヒの趣味か？

「なんじゃあ、こりゃあ！！」

幸い、かどつかは分らないが目の前には鏡がある。

頭には中世の兜のようなものが装着されている。

そして、自分の体をじっくり観察する前に俺は鏡の中に吸い込まれた。

んゝなぜか戦い方を知っている。

この左手の龍のようなガントレットのこの部分を引いて、ベルト(?)からカードを取り出し、ガントレットにカードを入れる。すると、剣やらなにやらが出てきて、この化け物と戦える。

『SWORD VENT』

上空からドラグセイバーが出現。相手に向かっていく。

まるで、誰かに憑かれたようにただ、無意識に相手に向かっていく。とくに強い相手でもなさそうなのでここでケリをつけさせてもらおう。

『FINAL VENT』

無機質な機械音がなると、ドラグレッダーが現れる。

「まったく、なんで俺戦い方なんて知ってるんだ？」

なんて、文句を言いながらジャンプをし、カラスのようなミラーモンスターにファナルベントを決める。

「だああああありやああ!!」

キックが当たるとモンスターは木っ端微塵に吹っ飛んだ。これで、終わりとばかりに息を付く

「まったく、またハルヒの陰謀か？」

おとなしくなっただと思えばすぐにこんなことに巻き込む。明日長門達に聞いてみるか。

ちなみに、物陰からナイトが覗き込んでいたのをキヨンは気づかなかった。

一章（二話キヨン、変身！！）：キヨン視点（後書き）

はい、ナイトが覗いてます（なに

まあ、ナイトには誰が変身したか想像はつくと思いますが、ハルヒではありません。

一章（三話物陰から除く少年）：神空視点

『あなたに質問があります』

『もし、一つだけ願いを叶えてられると聞かれたら、あなたは何を願いますか？』

『あなたに強い願いがあるなら、あなたは仮面ライダーとなるでしょう。』

こんな夢をみた後日、親父の仕事の都合で来月には転勤することが決まった。

ちなみに、俺には母親がいない。

4年前に交通事故で死んでしまった。

だから、身寄りの無い俺を男手ひとつで育ててくれた親父には感謝している。

別に一人暮らしでも大丈夫だ。と言ったが俺も引越しすることになった。

その後、一番衝撃を受けたのは親父は前から付き合っていた女の人
がいて引越しを機に結婚する。ということだ。

そして、その女の人には連れ子がいた。

その子は俺と同じ年らしく、名前は たかの 高野 みゆき 美由紀 というらしい。
結構美人の女の子だったのだが、初対面から馬が合わないのか俺に
は、ほとんどなにも話してくれない。

「えっと…美由紀ちゃんだっけ？」

「……………」

「よろしくね」

「……………」

「あ、あのおゝ？」

「……………」

「好きな本とかある？」

「……………」

あゝっすっげえゝムカツク！

「なんか、怒ってますか？」

「……………」

「くっ……」

なぜ何も喋らない！？（怒）

んで、引っ越して数週間後、俺は一人暮らしをしたいと訴え、北高から10分ぐらいのところにアパートを借りた。
まあ、家においても気まづくなるだけだしな。

そうそう、あともう一つ驚いたことがある。

俺、仮面ライダーになったんだ。ごく最近に。

ミラーモンスターは鏡の中に存在している。

そして、人間を襲うためにときどき鏡の中から出てくる。被害が出る前に仮面ライダーがミラーモンスターを倒す。それがパターン。

もつとも、それは一部のライダーで、本来の仮面ライダーの目的は自分の願いを叶えるために他のライダーを殺すこと。

ミラーモンスターは単なる障害にすぎない。

そのうち、この世界でもライダー大戦になることだろう。

ちなみに、さきほど龍騎が誕生したようだ。

できれば、13人がそろわないで欲しいのだが…

あまり強いモンスターではなさそうだし、ここは龍騎の戦いを見物することにした。

龍騎はファイナルベントのカードをベントインしてドラゴンライダーキックを打ち込む。

「だああああありやああ!!」

キックが当たるとモンスターは木っ端微塵に吹っ飛んだ。

龍騎は息を付くと奇妙な言葉を残し、ミラーワールドを去った。

「まったく、またハルヒの陰謀か？」

ハルヒ?…たしか涼宮さんの下の名前もハルヒっていったな…

(もしかして、新しいミラーワールドの管理者って涼宮さんなのか?)

考えてもラチがあかない。

管理者だったらオーディンとして姿を見せるだろう。

え？新しい管理者ってなにかって？後書きで説明するよ。

一章（三話物陰から除く少年）：神空視点（後書き）

転校する一週間前、つまり一ヶ月前かな？

俺はナイトのカードデッキを拾い、ミラーモンスターと戦い始めた。そして、転校する前日に夢で神崎士郎に会った

『私は別の世界でライダーを作り、ミラーワールドを管理していた』
『しかし、この世界では私ではなく、別の人間がミラーワールドを管理している』

『へたしたら、世界が崩壊してしまうかもしれない』

せ、世界が崩壊するだって？

『そこで、お前には新しい管理者が暴走を始めたら「コア・ミラー」を封印してほしい』

コア・ミラー？

『ミラーワールドのどこかに存在するミラーワールドの中心だ』

それを封印すればいいんだな？

『しかし間違いを犯すな』

間違い？

『この私も一つ、間違いを犯していた』

すると、目の前の男（神崎士郎）は手を上げると、俺の頭（？）のなかにイメージが浮かんできた。

そのイメージは、別の世界で起こったミラーワールドでの戦いだっ
た。

そして、神崎士郎は最後に…

『過ちを繰り返すな』

と、言い残し消えた。

一章（三話古泉も変身！）キヨン視点（前書き）

ここ何日かインフルエンザで寝込んでいました。

まだ本調子じゃありません。

でもできるだけ頑張りたいと思います。

一章（三話古泉も変身！）キョン視点

……。

なにから説明したらいいのやら…

今日の昼に先日話した（記した？）ようにゲーム大会があった。

いろいろと都合があつて、そのゲーム大会については…具体的には書けない。

一つだけ言えることは長門の呪文によつて大会が無茶苦茶になった。

「こ、こんなズルがあつてたまるかぁ!!」

ズルはズルなのだが、ばれないズルはズルじゃない！

「あ、アニキ!! やつちまいましようや!!」

「おうよ! こいつらの魂とつたるぞ!」

まで、まで、映画の見すぎだっ! そのまえにセリフがダサイって!!

—その瞬間—

【キーン…キーン…キーン…】

最近感じるようになったミラーモンスターの気配を感じた。

「っ、伏せる!!」

「あん？」

その瞬間、ゲームの画面（未使用）からレイヨウ型のモンスターが現れた。

「なんだあ、こいつ!!??」

「ば、化け物だあ！」

「逃げろ！逃げろお!!」

ゲームセンターにいた連中はほぼ逃げた。

逃げていないのはSOS団のメンバー5人のみ（神空はこういう事について話していないのでまっさきに古泉に外へと出された）となり、たぶん逃げた奴らを追うためにモンスターは画面へと戻った。

「キョン！あれ、何？」

「宇宙人が何かじゃないのか？」

冗談をかまししながら、古泉にこっそりと質問する。
ちなみに、ハルヒは朝比奈さんと長門によって外へと追い出されていた。

「お前はあの力をあの怪物に対して使えるのか？」

「残念ながら、生身の肉体ではあの空間に進入することができず、むしろ力も使用することもできません」

「じゃあ、お前も”アレ”をもってるのか？」

すると古泉は俺にだけ見えるようにポケットから緑色のカードデッキを出した。

「じゃあ、お先にいきますね」

古泉がさっきのカードデッキを画面に向けるとVバックルが出現した。

「変身…」

古泉が変身した姿は、一言で言ってしまうえば緑色のスキンが覗くロボット、というところか。

カードデッキから想像するに契約モンスターは牛（オックス？）型もモンスターだろう。

「じゃ、行ってきます」

そういうと古泉は鏡の中へと吸い込まれていった。

「んじゃあ、俺も……」

黒いカードデッキを画面にかざすと画面の中からVバックルが出現する。

「変身！！」

ポーズを取り、Vバックルにカードデッキを装填すると体に鎧のような物が装着される。

「しゃあ！キバって、いくぜ！」

…どこかで聞いたことがあるセリフを吐くと龍騎^{キョウ}は画面の中へと吸

い込まれていった。

ミラーワールド ソルダ
戦場では古泉がすでに戦っていた。

先ほどゲームセンターの画面から現れたレイヨウ型のミラーモンスターは5匹に増えていた。

「どうだ？古泉」

「キリがありませんね…」

「ここは、一気に決めるか」

ストライクベントのカードを引きながら話を持ちかける。

「そうしましょう」

すると、古泉はシュートベントと記されているカードを引いた。

『STRIKE VENT』『SHOOT VENT』

「はああ…だあ…！」

召還されたドラグクロの業火によりレイヨウ型のモンスターを焼きながら、逃げ場を奪う。

「ふんもっふ！」

とどめに古泉の肩に装着された馬鹿でかい銃により、モンスターが蹴散らされた。

その後、ゲームセンターに戻った俺たちはハルヒに何をしてたのかしつこく聞かれたのだが、説明できるわけもなくなんとか言い訳をして、解散となった。

―数日後―

「キョンー！昨日、ネットニュースの【WASHIジャーナル】を調べてみたら出てきたわ！」

「なにがだ？」

「仮面ライダーよ！仮面ライダーー！！」

「か、仮面ライダー？なんだ？それ」

「ちょうど印刷してきたわ！」

ハルヒが鞆から出したB5ほどの紙に印刷されていた見だしはこうだ。

【鏡のなかから現れた！？我等のヒーロー仮面ライダーー！！】

その見だしの下には俺が変身した龍騎と古泉が変身したゾルダ、そしてだれかは、解からないが一番最初に目撃されたというナイトの写真が貼られていた。

「ああ、ゲームセンターでの件か」

ゲームセンターの近くの鏡では俺達の戦いが生中継されていたらしい。

「そうなのよ！だから、あたし達で調べるわよ！！」

いやな予感しかしないが一応聞いてみる。

「な、なにをだ？」

「仮面ライダーをよ！！！」

一章（三話古泉も変身！）キヨン視点（後書き）

次回予告できな、ハルヒ達は仮面ライダーについて調べるために街へと調査に行きます。そこでキヨンはハルヒに……
になるかもしれません（なに）

一章（五話この調子でいくと…）キョン視点

待ち合わせの場所にはハルヒが一番最初に来ていた。

「今回はあたしが一番ね」

前回、俺より後に来たのを根にもって早く来たのだろう。

「他のやつらはいないな」

「そうね」

そっという俺も時間20分前に来たのだが…

「いつからいるんだ？」

「40分前」

ていうか…そんなに早く来てどうする？

なんだかんだ待っていると、次に神空が来た。

「あれ、二人とも早いですね」

一番最後になると思ってた奴が3番目にきやがった。

「新入りなのに早く来るなんて感心ね」

「そうですか、ありがとうございます」

しばらく待つと、5分後に長門、そのまた5分後に古泉という順番で来た。

「あとはミクルちゃんだけね」

これで、朝比奈さんが奢ること決定となった。

… 10分後…

「すみません、遅れましたあ」

「遅い！罰金」

これで、全メンバーがそろったところで喫茶店へゴー。

もちろん、喫茶店ではくじ引きが行われた。

俺と古泉と長門が北コース、ハルヒと朝比奈さんと神空が南コースだ。

「じゃあ、2時に集合ね！」

「はいはい」

「そういや、朝比奈さんから未来人だって説明されたのって第一回

目だったな」

「ええ、そうですね」

「説明するのか？神空に」

「僕はその必要があると思います」

「つていうか、あいつはなにか特殊な力とかあるのか？」

「さあ、わかりません」

「長門はなにか知らないか？」

「わからない」

「そうか」

別になにも探す気は無いわけだしまた図書館で休むことになった。

一方、神空は…（ここから神空視点）

「いい？じゃあこちらへんの鏡、全部チェックするわよ！」

そういうと涼宮さんは早歩きで鏡をチェックし始めた。

「いないわね」ぱつと出てこないかしら」

「そんな簡単に出てきたらつまんないと思いますが…」

「でもね、結構目撃情報とかあるのよね」

まあ、ミラーモンスターはそれこそ万といるからな。
それこそヒョイヒョイとは出てこないが…

「次！あっち！！」

「あ、はい」

「わかりましたあ」

といつてもずっと歩いてるのもなんなんで俺はゲーム機をだした。

「あ、PSPじゃない！ソフトなに？」

「モンハンセカンドGです」

「あたしも持ってくればよかった」

「ははっ、今度部室でみんなと対戦でもしませんか？」

「ん〜それもいいわね……」

結局、午後2時になつてもミラーモンスターは出現しなかったた。

近くのレストラン（キヨン視点）

例のごとく2回目のくじ引きが行われた。

朝比奈さんは説明するチャンスが無かつたらしく、神空には説明しなかつたらしい。

俺と神空と長門が東コース、ハルヒと古泉と朝比奈さんが西コースとなつた。

「神空、実は説明しなければいけない事がある」

「なにをですか？」

「いいか？俺も始めて説明された時は信じられなかった、だが、今は信じてもらいたい」

「はぁ…で、なにをですか？」

「…私は情報総合思念体に作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス」

「……は？」

「あー…つまりな、全宇宙の情報が集まってできた情報生命体、それを情報総合思念体というんだが…」

「はぁ…」

「んでな、その情報総合思念体は実体が無いんだ、だから長門みたいなやつが俺たち人間とコンタクトを取るんだ」

「えと…つまり宇宙人だと？」

「そうだ、話が速い」

「…その宇宙人がどうして高校生として俺たちとコンタクトを取っているんですか？」

「いやな、別に侵略することが目的じゃないんだ」

「じゃあ、目的は？」

「涼宮ハルヒの観察………」

「涼宮さんの観察？」

「ん…なんと言ったらしいのやら…今から4年前にな、情報爆発つてのが起こったらしい、つまり情報の奔流だな」

「そう、それが涼宮ハルヒを中心に起こった私たちはその原因を調べるため涼宮ハルヒの調査をしている」

「はぁ…情報爆発ねえ………」

「そのほかにも古泉が超能力者だったり朝比奈さんが未来人だったりするのだが…」

「へ？超能力者？未来人？」

「あ、まだ信じなくてもいいぞ、そのうちいやでも信じなきゃいけなくなるときが来る」

「え……」

――

神空はまだ信じられないという顔をしながらうつむいている。無理もないがな……

『キーン…キーン…キーン…』

「っ……」

ミラーモンスターだ！どこかに鏡は？

「あそこ……」

すると、長門はどこかの会社の窓を指差した。

「おっサンキュ…あれ？神空は？」

「見失った……」

「そっか…まあいいや」

カードデッキを鏡にかざすとVバックルが出現した。

「変身！」

カードデッキをVバックルに装填すると龍騎の姿が現れた。

「しゃあ!」

「私も…」

「え?」

長門がポケットから出したのは赤紫色のカードデッキで、紋章はエ
イを模していた。

「変身…」

長門が変身した姿は…エイのような姿で、腕にはエイそのまんまの
姿の武器を持っていた。

「よし、行くぞ」

「肯定…」

ミラーワールドには蜘蛛方のミラーモンスターがいた。

「蜘蛛…か」

「…かなり強いモンスター」

たしかに、見た目はかなり強そうだ。

「よし、先手必勝！」

『SWORD VENT』

「だりゃあー！」

しかし、以外に装甲が硬く、ドラグセイバーは弾かれた。

「か、固っ！？」

そのとき、蜘蛛の後ろ側から襲撃があった。

「ぎしゃあー！」

「……………」

後ろにいたやつナイトの容姿は…騎士という言葉がピッタリな奴だった。

「なんだ？あいつ」

「ライダー、ナイト……」

「ナイト？そのまんまじゃないか」

そっぴやあの新聞みたいなやつにも載っていたような気がする……

「デイスパイダーか…こんな雑魚に苦戦するなんてな」

「なににー！？てめえ、言わせておけばー！」

ドラグセイバーで斬りかかろうとしたが、あっさりと避けられた

「あれえー！？」

「無駄な動きが多すぎるんだよ」

ナイトに腹部を蹴られ、すこし吹っ飛ぶ。

「おわぁ!?!」

「それに、僕はライダー同士の戦いはしたくないんだ」

すると、ナイトは俺に背を向け、デイスパイダーとかいうモンスターの方へと向き直った。

『FINAL VENT』

電子音が鳴ったかと思うと、空から巨大な剣（いや、どちらかというと槍）と蝙蝠が出現し、ナイトの背中へと装着された。

「なんだ？あれ…」

「ダークウイング」

ダークウイング

「闇の翼？」

ダークウイングは、マントに変形しナイトは空中へと飛翔した。

次の瞬間、ダークウイングはドリルのようにクルッとナイトを包み、デイスパイダーへと突っ込んでいった。

「な、なんと!?!」

そして、デイスパイダー蜘蛛の化け物は木っ端微塵に粉碎された。

「これだけは言っておこう」

ナイトが俺に話しかけてきた。

「龍騎は重大な鍵になっている、ま、別の世界じゃ主役だったしな」
「え？あ、ちよつと！」

別の世界？主役？なんだかあまり聞かない単語を残しナイトは去った。

余談だが、声がなんとなく神空に似ていたような気がする。

その後、ハルヒ達と合流したが、向こうはなにも起こらなかったらしい。

一章（五話この調子でいくと…）キョン視点（後書き）

題名の通りこのままいくと、ミクルも変身します。
まあ、このままいきますけどw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4545g/>

涼宮ハルヒの龍騎

2010年10月15日01時20分発行